ニューギニア戦線記

亡き戦友の冥福を
心から祈って

元 第36師団通信隊
隊附 佐 藤 久 治

まえがき

終戦から40年余の歳月を経た今日、生を長らえてあるは部隊長はじめ生還者諸兄並びに、意あらずして英霊となられた戦友の御加護によるものと、深く深く頭べを垂れるばかりである。思えば異国の中国大陸及び南方ニューギニアに於て青春のすべてを抛つて、艱苦欠乏に耐えながら幾多死戦を乗り越え、弾丸飛雨の中にあり、毅然として動ずることなく、軍の命脈である通信線の架設、または無線通信の電鍵を手にして重要な任務を貫徹した戦友の当時の姿が髣髴としてきて、寸時も忘れ去ることはできないのである。

戦場の実相を伝え、当時の労苦を顕彰し、以つて平和国家の建設に盡くすことこそ、戦波勇士の英霊に報ゆるものとの一念で筆を手にしてから数年、光陰は矢の如く過ぎ去り、日を追うて忘却の度も増すばかりにて、これではならじと己を叱咤しながら進めてきたが、頼みとする従軍手帳や日記帳も「サルミ」にて焼却し、確たる資料もなく、40年前の記憶を辿り辿り記述したるものなれば、私本の域を脱するあたわざるものとなつた。従つて確実を期することは至難の業と思われたが敢えて脱稿に踏み切つた次第である。内容の多くに事実と相違する点無しとせず、ただただ尊い生命を国に捧げた戦友に対し、心から冥福を祈ると共に、御遺族の方々の御健福を祈りあげる心衷なれば、寛容の程願いあげるものである。

なお、中国山西省潞安（長治）等の詳細については先輩諸兄の記述もあることと拝察、その沿革史の掲載にとどめることとした。

輝く南十字の星

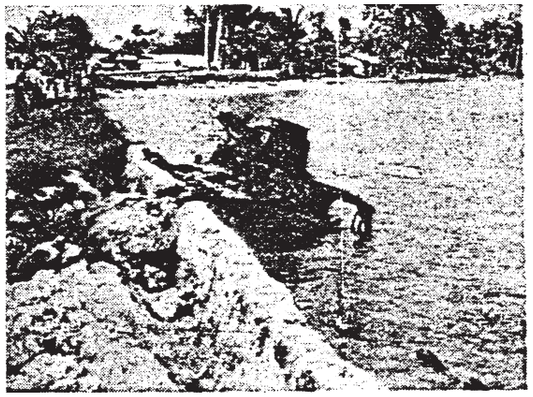
昭和 18 年 11 月 18 日第 36 師団通信隊主力 大西部隊長以下 239 名は南方転進のため、上海港を出帆した。途中台湾高雄港、比島マニラ港に寄港、12 月 20 日「マニラ」にてビアク支隊（歩兵第 222 聯隊）に配属の無線 2 個分隊 小滝軍曹並びに長澤伍長以下 13 名の戦友と袂を別つこととなつた。その後セブ島セブ港に寄港、ハルマヘラ島を経由、12 月 25 日 1 ヶ月余を過して目指す西部ニューギニア、モルッカ州、「サルミ」に無事上陸したのである。

その時、第 36 師団の任務は「サルミ附近を占領し、先づ航空軍に協力して、航空基地の設定（サワル飛行場、ウオスケ（ワイスケ）飛行場）に任ずると共に、来攻する敵をその要域において破摧し濠比決戦の支撐たるべき」にあつた。我が通信隊は上陸後直ちに部隊装備糧秣等の揚陸に全力を傾注し、漸く経つた頃には、既に日は沒しようとして薄暮の空で、椰子の葉陰を飛び交う大蝙蝠（こうもり）の叫び声や羽音に驚きながら「ああ」とうとう俺達は南の果てに着いたのかと感無量のものがあつた。揚陸作業と並行して中里軍曹の率いる無線分隊は師団司令部近くの軍通信隊（2ATL）の傍に設営を開始するとともに、石﨑少尉の率いる有線小隊は直ちに師団司令部と各部隊間の通信網架設のため行動を開始していたのである。その夜通信隊本部はサルミ半島の土人部落の一角、サゴ椰子の葉端で葺いた吹けば飛ぶような既存の家と天幕舎に新征旅第一日の夜を迎えたのであつた。

眼近かにみるその夜の南十字星はほんとに眩（まぶ）しい限りで、なんと美しかつたことか。

思えば、この転進作戦は敵潜水艦の魚雷攻撃による危険極りない海域の突破行であつたが、全船団無事新任地に着くことの出来たのは天祐、神助の賜物と申すほかなかつたのである。

「サルミ」上陸後、間もなく部隊長の更迭があり、大西部隊長は健康を害され内地に転属、間瀬三郎少佐が新部隊長として着任されたのである。同時に隊附佐々木左馬太大尉も内地の通信学校に転属となつたことも思い出される。その後しばらく経つて鹿野正雄中尉が新たに着任されたのであつた。



戦車残骸のみえる
「サルミ」半島附近

当時サルミ要域の地形はサルミ半島附近、南興農園（フーマオ農園）及びマツフイン地区の若干が伐開せられているに過ぎず、ニューギニアに共通するジヤングル地帯であった。現地自活力は殆んど皆無に近く、その上ジヤングル内は河川、湿地が錯綜しており、悪性マラリアが浸潤し、部隊の行動及び生存に大なる障害を呈していたが、サルミ地区の戦場生活は目にするものすべてが物珍らしくて、殺伐たる雰囲気もなく、いつしか心に余裕を覚えながら、いつか訪れるであろう戦斗準備のため、忙しい毎日を過していた。四季の移り変りのはつきりしない気候風土に戸惑いながらも昭和 19 年の新年を無事に迎え、3 月へと移つたのである。その当時部隊の編成は次の概要であつたと推思される。

第36師団通信隊　編成表（概要）

昭和19年4月

職務	階級	氏名
部隊長	少佐	間瀬三郎
軍医	大軍尉	對馬乾六
隊附	中尉	鹿野正雄
同	少尉	髙橋喜代治
無線隊長	中尉	佐々木榮太郎
有線隊長	少尉	石崎隆三
人事係	准尉	津川美佐男
技術	准兵尉（少尉）	柿林翁
情報指揮	曹長	千田久米
糧秣	曹長	和田孝二
被服物品	曹長（准尉）	山崎六郎
兵器	曹長（准尉）	小笠原信雄
庶務	曹長	木村志衛治
衛生	軍曹（曹長）衛	鈴木誠一
圣理	軍曹（曹長）主	佐藤久治
暗号	軍曹	
功績		
無線分隊長	軍曹（曹長）	加藤政治
同（ワクデ島）	軍曹（曹長）	川村忠璋
同（カルモチヤ）	軍曹（曹長）	石橋萃一
同	軍曹（曹長）	佐藤養治
同	軍曹	中里文吉
同	軍曹	伊藤金三郎
同（ビアク支隊）	軍曹（曹長）	小滝三郎
同（ビアク支隊）	伍長（軍曹）	長沢榮治
同	伍長（軍曹）	塚田友治
有線分隊長	曹長	佐藤次郎
同	軍曹（曹長）	橋本芳一
同	伍長（軍曹）	中村三郎
同	伍長（軍曹）	山畠直吉
同	伍長（軍曹）	大橋利雄
同	伍長（軍曹）	
将校（6）　准士官（2）　下士官（21）　兵（210）　計（239）		

（註）1.（　）内階級は戦死、戦傷死、戦病死後
2. ビアク支隊配属隊員も含む（13名）
3. 記憶によるものなれば相違する点有り

（付記）後任者
衛生　衛生軍曹　肥後啓二
圣理　主計伍長（軍曹）　片倉豊治

白と緑の島　ワクデ

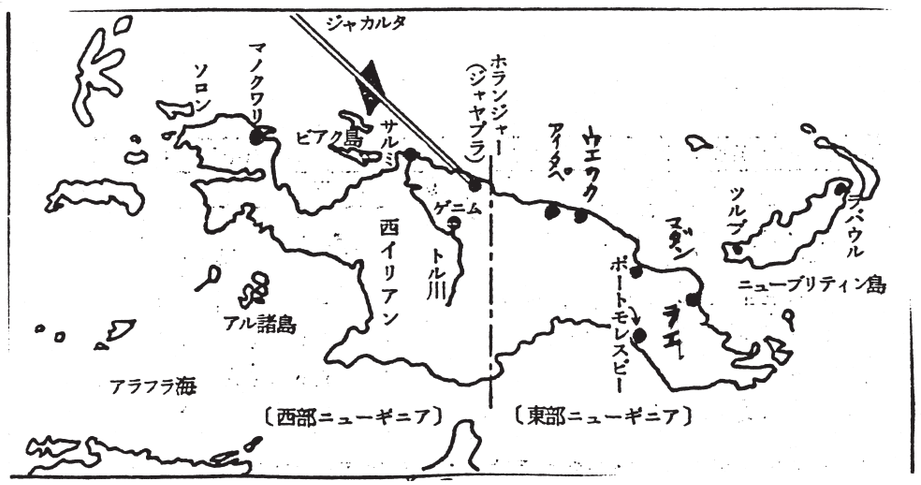
昭和19年3月に入つて間もない或る日、私は無線分隊の暗号書（乱数表）更新のため「特使」としてサルミ桟橋をはなれ、ワクデ島目指して、大発艇上の人となつていた。途中「マツフイン」に立寄り、歩兵第224聯隊の連絡将校も同乗、昼過ぎワクデ島に到着した。ワクデ島は周囲5キロぐらいの椰子生い繁げる珊瑚礁の小さな島で、東西にわたる一直線の飛行場で占められていた。当時同島は航空隊の他、224聯隊9中隊（9/224i）航空隊無線（FL）と第36師団通信隊（DTL）無線1個分隊（川村軍曹以下7名）など600名で守備していた。同島桟橋から海中を覗けば、水あくまで透明で、色採りどりの熱帯魚が遊泳しているのも見えて、まるで別天地のようであつた。連絡をうけて既に知つていたのか、川村軍曹の出迎を受け、隊員全員の元気な顔に接し、夫々挨拶を交わしていると突然敵機飛来の警報が全島に鳴り渡つた。上空を見あげると双発双胴の敵ロッキードP–38戦斗機一機が超高度で音もたてずに薄い2本の白線を引きながら飛び去つて行つた。聞けば、この頃は時々飛来するとのことであつた。（後にして思えば4月21日大空襲のための偵察であつたのである）その夜は分隊一同の歓待をうけたことは申すまでもない。宿舎の棚を見ると肉の缶詰やらウイスキー（空びんも）がずらりと並べてあり、その夜の食卓はサルミではみることも出来ないご馳走であつた。聞けば航空隊なみの給養を受けているとのこと、まことに羨やましい限りであつた。いつしか島はすつかり暗くなり、滑走路の両側に一列置かれたドラム缶の中にガソリンの廃油が赤々と燃えて、夜眼にもはつきり見える滑走路では夜間の離着陸訓練が盛んであつた。ゴーゴーたる爆音にも負（め）げず大いに話しが弾むにつれ海軍で流行つているラバウル小唄の替え唄などを披露してくれた。“浪の飛沫（しぶき）で眠れぬ夜は……”私は冗談で川村軍曹に「そろそろ俺と交替さねがや」と思わず云つたことであつた。そのとき全員に「絶対駄目だぞ」とはねかえされ、大笑いしたことが思い出される。「この島の椰子は格別に美味しいから部隊長殿に持つて行つてくれ」と川村軍曹から大きな椰子の実2箇と缶詰若干を土産にもらい、翌朝盡きせぬ思いを抱きながら別れを告げたのであつた。“さらばワクデよ、また来るまでは…”

私は思わず低く口ずさみながら帰艇の人となつた。7名の隊員とこれが最後の別れになろうとは神ならぬ身の知る由もなかつたのである。

運命の4月21日

戦場にしては、かくも平穏な日日を過していた3月中旬頃、「サルミ」東方400キロの地点に在る「ホーランジヤ」は米軍艦載機グラマンの空襲をうけるようになり、同地にあつた第6飛行師団は3月30日から31日にかけ、米軍のコンソリデーテッドB24重爆撃機のべ250機の波状攻撃をうけ、不覚にも日本軍の飛行機150機中130機余が破壊され、全く飛べない飛行師団となつたのである。4月に入り上旬から中旬にかけ、「マダン」「ウエワク」への米軍機来襲は極端に減少し、これに反して「アイタペ」「ホーランジヤ」への空爆がいよいよ激しくなつていた。

第2軍(セレベス)第18軍(「ヌンボク」から「ウエワク」に移動)は4月20日、空母4隻、戦艦、巡洋艦、駆逐艦10隻、他に強力輸送船団を伴う米軍機動部隊がニニゴ諸島北方を西進中なる情報を入手したが、両軍とも20日夜又は21日に「ウエワク」及び「ハンサ」附近に上陸の算大なりと考えていた。これは大いなる誤算であつたのである。昭和19年4月21日遂にニューギニア作戦



の決定的運命を迎えるに至つた。この日、既に東部ニューギニアを制圧した米濠連合軍は第18軍集結地「ウエワク」を横目に、その西方にある「アイタペ」「ホーランジヤ」「ワクデ島」「サルミ」へ同時に来襲してきたのである。翌22日、この日「ホーランジヤ」では低くたれこめた雨曇のもと、霧雨を混えながら夜の明けた午前5時、フンボルト湾西北の海上より百雷の轟が起き、それを合図に米軍第24師団基幹部隊が潮のごとくフンボルト湾とタナメラ湾に押し寄せて来た。この状況下にあつてあまりにも不意をつかれた日本軍は何んら抵抗する力を持ち合わせなかつたのであつた。急激な米軍の進攻に日本軍地上戦斗部隊である北園部隊は「コヤブ」に集結、第6飛行師団は「ゲニム」に後退した。米軍上陸の翌4月23日以後、北園部隊は米軍攻撃の矢表に立つて戦つたが兵力の差は如何ともしがたく、ずるずると西方へ後退し5月1日同部隊は「ゲニム」に到着、第6飛行師団と合流したのであつた。このとき北園部隊は3,000名の戦死者を出し、生存者は僅か800名にすぎなかつた。飛行機を失つた第6飛行師団は早くも撤退したため殆ど無傷の5,000名を数えていたのである。第2方面軍は敵のホーランジヤ上陸の報に接し、第2軍（セレベスからマノクワリに移動）に対し、第36師団より歩兵2個大隊砲兵1個大隊を以て救援せしむべく命じた。これにより、歩兵第224聯隊（聯隊長 松山大佐）の主力（2個大隊他）はホーランジヤ救援のため4月27日と5月3日の2回に別けて、先遣2個中隊を舟艇に乗せて「アルモツパ」東方に上陸したが、5月17日ワクデ島、トル河々口附近（「トム」「アラレ」）に米軍上陸の報入るや、それを攻撃するため、師団は松山支隊に対し反転を命じたので糧秣の一部をホーランジヤ転進（撤退）部隊に残して急遽反転したのであつた。

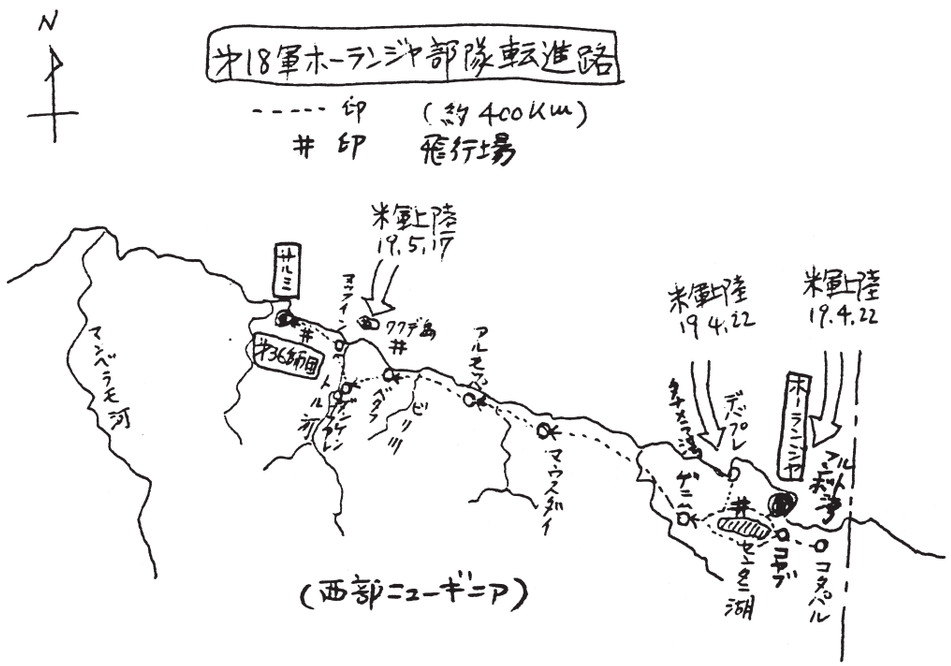
悲惨を極めた転進（撤退）

ホーランジヤにあつた各部隊が「ゲニム」に撤退集結を完了した昭和19年5月1日、第6飛行師団長は各部隊の将兵に対しサルミ転進（撤退）の命を下したのであつた。約8,000名の将兵は10梯団に別かれて、友軍第36師団の在る「サ

ルミ」へと逐次出発したのである。このとき北園部隊 800 名は残留し、後発隊として最後に転進した。その生存率は 0.4% にも満たなかつたのである。

ちなみに、第 18 軍ホーランジヤ部隊 15,000 名中「サルミ」より生還したる者は 150 名、生存率約 1% であつた。転進者の多くはトル河に辿りつくまでの間に斃れ、5 月下旬から 6 月上旬にかけてトル河にたどりついた転進者の殆んどが河畔「ダンケン」からその上流「ブファーレ」に渉る一帯で渡河できず死を待つより他無かつたのであつた。いかにこの転進（後退）作戦が悲惨なものであつたか防衛庁戦史の次なる記録をみてもわかるのであつた。『ホーランジヤ戦斗に引続き実施されたる約 400 キロの転進は未開、瘴癘、ジヤングルの連続、進むに道なく、幾多横たわる大小無数の山嶽、湿地、河川を越えざるを得ず。その間飢餓、空腹、栄養失調、これに加えるにマラリアの狷厥は機動を困難ならしめ、遂に白骨をしてホーランジヤ、サルミ間の道標たるの感あらしむるに至れり』と。まさに、ビルマ転進（撤退）作戦に匹敵するぐらいの無慙（むざん）な撤退であつたのである。

第 36 師団の隷下、指揮下にあらざるホーランジヤ部隊に関し、記述せざるを得なかつたのは、その後、この転進部隊が第 36 師団各部隊に諸種の影響をもたらし、転進者に対する対応を色々な形で行なわざるを得なかつたからである。



サルミ附近戦斗突入

昭和 19 年 4 月 21 日、優勢な米軍のホーランジヤ進攻と時を同じくしてサルミ並びにワクデ島は米軍艦載機グラマンの猛襲をうけたのであつた。

その日「サルミ」の朝 5 時は低く雨雲がたれこめていた。ただならぬ飛行機の騒音に驚き、とび起きて上空を見上げると無数のグラマンがまるで禿鷹の群れのように舞いながら、下方の獲物を狙つていたのである。見ている間に一機二機三機と急降下し、つづけ様に爆弾を投下、その後は雨霰の如き機銃掃射をうけたのである。あまりにも不意をつかれた急襲に、サルミ半島附近に設営していた我が通信隊本部は不充分な火力装備を手に防戦、これ努めるしかなかつたのであつた。このときサルミ通信所は爆破され、グラマンの爆撃機銃掃射により 6 名の戦友が壮烈な戦死を遂げ英霊となられたのであつた。

［英霊の尊名］

館野正一（岩手）　阿蘇藤太郎（山形）　佐藤芳夫（山形）
長谷川武治（秋田）　川村馨祐（山形）　及川正治（東京）

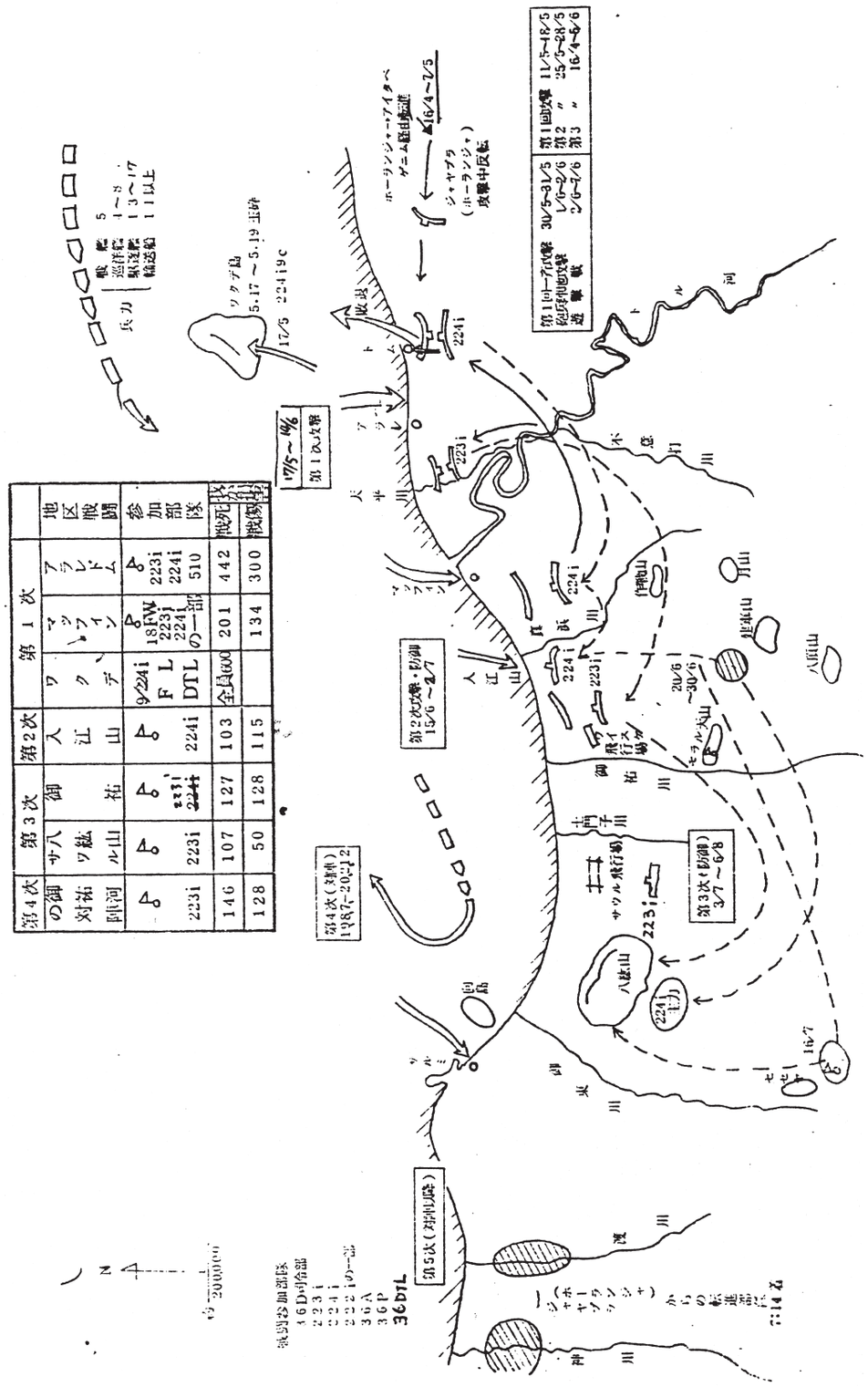
後日確認されたことながら、時を同じくしてワクデ島の無線 1 個分隊分隊長以下 7 名も全員壮烈な戦死を遂げ英霊となられたのである。

［英霊の尊名］

川村忠璋（秋田）　坂本一郎（岩手）　菊地香久治（山形）
遠藤一雄（秋田）　髙橋善藏（岩手）　太田幸三郎（山形）
伊藤仁太郎（山形）

サルミ地区には約一万人分の師団糧秣があつたといわれたが、この日の爆撃でその半分を焼失するに至つたのである。その夜通信隊本部は明朝からの米空軍の再爆撃を避けるため、保有していた糧秣と器材を部隊全員の臂力で「南興農園」を横切り、後方ジヤングル地帯に運搬、一時的避難を敢行した。その後部隊本部は「八紘山」丘陵南面に移動し、米軍上陸に備え配置された各戦斗部隊と師団戦斗司令所間の通信連絡の任務に当つたのである。

サルミ附近戦闘経過概要図



第4次の御対祐陣河	第3次 御祐	第2次 入江山	第1次 ワクデ	第1次 マツフイン	第1次 アラレ・トム	地区戦闘
223i	223i	224i	9/224i FL DTL	18FW 223i 224i の一部	223i 224i 510	参加部隊
146	107	103	全員600	201	442	戦死
128	50	115		134	300	戦傷

この間連日の如く昼はコンソリデーテッド B24 を含む米濠空軍機の猛爆をうけ、夜は米軍遊撃艦隊による艦砲射撃をうけて熾烈な戦斗状態に突入したのである。高射砲隊を主とする対空部隊は善戦して相当の戦果を挙げたものの、数量をほこる米軍機艦艇の攻撃はますます激しくなるばかりであつた。この時点における師団の作戦構想は「作戦山」及び「八紘山」附近に拠点を構成し、周辺地区を戦場となし、準備したる道路により活発な機動を行ない随時随所に敵を撃破せんとするものであつて、その機動範囲は準備の進捗に伴い、先づトル河附近まで、次いでワクデ島対岸地域に及ぼすものと予定し、兵力配置の重点を「作戦山」附近に置いていたのである。我が通信隊もこの作戦構想に基づき逐次配備され、戦斗準備に入つていたのであつた。このような戦斗状態が日を追うごとに激しく 5 月 16 日まで続き、昭和 19 年 5 月 17 日午前 4 時頃より約 3 時間に亘る猛烈な爆撃及び艦砲射撃の後、戦艦 5、巡洋艦 8、駆逐艦 17、約 30 隻の艦艇に護衛された輸送船 11、舟艇 20 の有力な米軍機動部隊が、ついに「ワクデ島」及びその対岸「トム」「アラレ」に来攻、上陸を開始した。このときの上陸米軍は第 41 師団約 2 万であつた。第 36 師団戦斗指令所は情況判明と同時に松山支隊（前記ホーランジヤ救援部隊）をもつて、これに反転攻撃を命ずると共に、19 日トル河右岸に攻勢をとるに決し、聯隊長 吉野大佐の指揮する歩兵第 223 聯隊主力をもつてトル河上流より「天平川」以東「アラレ」へ、又加藤中佐の指揮する歩兵第 224 聯隊残置部隊をもつて直路「トム」へ、夫々敵の上陸地点に向つて攻撃部署を展開した。またワクデ島守備隊は八紘山展望哨が 17 日には全島火の島となつているのを望見、終日砲撃をうけていること、18 日には多数の舟艇が達着していること、19 日には静穏に帰し、午後にはかすかな煙が各所から立上つていることを逐一報告して来ておるものの、4 月 21 日の大空襲で大半戦死者を出した模様であり（川村無線分隊 7 名は空爆により全員戦死）生存者は上陸米軍に抗しきれず全員壮烈な玉砕を遂げたのである。

その後米軍はさらにマツフイン地区に上陸を開始して来たため、これを撃退すべく進出した 224 聯隊の一部は 5 月 19 日トル河左岸において敵と触接し 21 日以降、劣勢克く果敢な攻撃を反復したが優勢な敵は逐次西方に進出し、24 日には奮戦中の地区隊長 加藤中佐は壮烈なる戦死を遂げマツフイン地区は一時敵

手に委すこととなつたため師団は兵力を転用して5月27日には敵の前進部隊を攻撃し、その進出を阻止した。

トル河右岸においては5月25日以来攻撃準備中であつた松山大佐の指揮する松山支隊（224聯隊主力）が、27日夕刻第7飛行師団の適切なる爆撃協力のもと、「トム」附近の敵を攻撃して海岸に達し、ワクデ島方向に舟艇によつて退却する敵に追撃射撃を加えた。同時に223聯隊は「アラレ」附近の敵の前面に進出し攻撃を準備しつつあつた。この日（5月27日）は米軍がビアク島に上陸開始した日でもあつたので、尓後はビアク友軍の急変に策応し猛烈果敢に相次いで攻撃が行なわれたのである。即ち5月30日223聯隊主力は「アラレ」附近の敵を夜襲して、一部は敵陣に突入し、火砲及び重車輌を破壊した。その後は果敢なる遊撃戦を反復し、大なる戦果を収めたのである。

又、トル河左岸においては31日以来224聯隊に加え新たに増強された223聯隊の一部の奮戦により6月2日マツフイン地区を奪回し、一挙にトル河々口方面に敵を圧迫したが、敵の抵抗また逐次頑強となり、爾後5日間の反復攻撃にも拘らず、これを完全に撃退することは出来なかつた。この間トル河右岸の松山支隊は糧食既に盡きたるも屈せず、所在のサゴ椰子を食い、6月3日トム附近の敵に再度攻撃を敢行したが、敵の抵抗は頑強で、幹部の死傷続出したため、戦斗は爾後遊撃戦に移行したのである。

6月6日敵はトル河左岸に攻撃を再開し、マツフイン地区に於て攻防争奪の激戦が繰返されることになり、遂に同地区は再び優勢なる敵の占領するところとなつた。尓後、敵の進行を阻止すべく攻撃をくりかえしたが6月9日敵の一部は「入江山」方面に突進するに至つたため6月10日師団戦斗司令所はトル河右岸の攻勢を断念し、師団主力を「作戦山」附近に集結し、敵を錯雑地に誘致して撃破するに決し、14日、223聯隊主力は「作戦山」西側に又松山支隊（224聯隊）はトル河左岸の残存部隊を併せ指揮し「入江山」附近に各々配備についたのであつた。

激しい戦斗を連日繰りかえしていた頃、前述のホーランジヤ転進部隊がトル河々畔に辿りついたのはこの時期（5月下旬～6月上旬）であつた。転進してきたホーランジヤ部隊の將兵を救うため、師団命令により傘下各部隊の將兵全員がとつておきの乾麺2袋づつを供出したのもこの頃であつた。

（以上　5月17日～6月14日　第一次攻撃）

6月18日頃より米軍は逐次「入江山」に進出して来た。224聯隊長 松山大佐は22日自ら陣頭に立つて終日逆襲したが一部據点奪取のほか奏効せず、自らは右大腿部に貫通銃創を負うたが、聯隊長は愈々毅然として諸隊を督励し、23日、24日逆襲を反復し24日には「入江山」最高点を奪回するに至つた。この日「入江山」西麓に上陸を企図した敵の水陸両用戦車を先頭とする7～8隻の上陸舟艇を一度は洞窟内の山砲をもつて見事に撃退したが、敵は強硬に肉迫、火焔攻撃をもつて山砲を制圧したため、遂にその上陸を成功せしむるに至つた。その後224聯隊は「入江山」西麓に上陸した敵軍の進攻を阻止するため、夜襲、逆襲を繰り返し、7月初旬に至るまで壮絶なる戦斗を展開したのであつた。

（以上　6月15日～7月2日　第二次攻撃）

前述戦斗経過のごとく、第一線の各戦斗部隊が激しい戦斗を連日くりかえしていた第一次から第二次攻撃の間、我が師団通信隊は弾丸飛雨の中、師団戦斗司令所、各戦斗部隊、各関係諸隊間の通信連絡に死力をつくして奮斗していたのであつた。

中でも、第一線戦斗部隊の戦場にあつて、弾丸飛雨のさ中、通信連絡網の架設に率先奮斗していた有線分隊長 中村三郎伍長は6月29日「ウオスケ一本橋」において敵弾をまともに受け、壮烈な戦死を遂げたのであつた。かくのごとき奮戦中、我が通信隊より配属され健斗の隊員中壮烈なる死を遂げ英霊となられたのは次の通りであつた。

○「作戦山」において　8名　英霊の尊名

小沢留次郎（岩手）　納谷孝一（秋田）　佐藤光雄（秋田）
小川市太郎（山形）　佐藤貞雄（山形）　生田慶太（熊本）
黒木一男（宮崎）　持留　栄（鹿児島）

○「ウオスケ（ワイスケ）」一本橋において　1名　英霊の尊名

中村三郎（岩手）

また、この間、野戦病院にて加療中、武運つたなく英霊となられた隊員は次の通りであつた。

○「サルミ野病」において　３名　英霊の尊名

山口義雄（岩手）　小山虎雄（岩手）　阪東善雄（滋賀）

○「シアラ野病」において　３名　英霊の尊名

井形新太郎（岩手）　富樫大吉（秋田）　町田雪子（東京）

かくの如く、第36師団が死斗を繰りかえしているさ中、ホーランジヤ転進梯団を逸脱し、はぐれ部隊と化し、転進路に出没しては転進梯団の同胞を悩ましつづけた不逞の一隊は、一早くトル河を渡り、サルミ地区へ入つた。そして、第36師団各部隊の糧秣集積所を襲い、無規律極まりない行動をとつたため、集積所守備員との間に味方同志の最悪状態を惹き起こすに至つた。まさに敗戦の悲劇であつたのである。

７月上旬に入り、米軍は更に西方「ウオスケ」（ワイスケ）地区にも上陸するに至り、師団は223聯隊224聯隊の戦線を「モラル天山」及よび「戦斗山」の線に収縮し、次いで「光丘」「八紘山」附近の作戦根據地内に集結して、ワイスケ飛行場及びサワル飛行場附近に於て米軍の上陸作戦を撃退するため盛んに死斗を繰りかえすに至つたのである。

各戦斗部隊に策応し「八紘山」に設営していた我が通信隊本部は端末各分隊が夫々の部署において奮斗を繰りかえしている時期、連日昼はB-24重爆撃機の絨毯爆撃をうけ、夜は遊撃艦隊の熾烈なる艦砲射撃を浴びたが、間瀬部隊長は本部並びに各分隊全員を督励、部隊全員師団戦斗指令所と各戦斗部隊間の通信連絡の任務に死斗を盡していたのであつた。

米濠連合軍による空爆及び艦砲射撃はますます熾烈となりたるに加え、通信隊本部のある八紘山南西地帯及び各配属分隊の展在する地帯はいづれも南方特有の密林多湿地帯であるため、糧秣の不足に加え健康を害するもの多く、隊員の苦斗は言語に絶するものであつた。

部隊の米、味噌などの主食は底をつくようになり、自活による食糧調達を行ない、生命を継がなければどうにもならなくなつた状況に加え、「トム」「アラレ」

「マツフイン」方面に完全上陸を達し、陣地を構築した米軍砲兵隊の猛烈な盲砲撃が新たに惹起して、極めて危険な状況に入つたため、昭和19年８月初旬頃通信隊本部は必要な一部隊員を残し主力は米軍の空爆と海陸両面からの砲撃を避けるためと、自活による食糧自給のため、一時八紘山地帯を離れたのであつた。

（以上　７月３日～８月６日　第三次防禦）

第三次防禦の間空爆及び砲撃により壮烈なる死を遂げ、又武運つたなく、病魔に冒され英霊となられたのは次の通りであつた。

○「建軍山」において　３名　英霊の尊名

信太芳太郎（秋田）　大曽根昇（山形）　片桐虎吉（山形）

○「カルモチヤ」において　２名　英霊の尊名

千代川幸平（岩手）　石橋萃一（佐賀）

○「ガニアム」において　５名　英霊の尊名

三浦清藏（青森）　山鼻直吉（岩手）　佐藤重一（秋田）

星　義重（山形）　鈴木吉弥（山形）

○「光ヶ丘」において　３名　英霊の尊名

渡会幸治（山形）　小松和之（山形）　大角忠雄（北海道）

○「ロンベバイ湖」において　１名　英霊の尊名

深瀬栄太郎（山形）

○「八紘山」において　13名　英霊の尊名

石田常吉（青森）　金子　清（岩手）　佐藤　勇（岩手）

石田菊治（秋田）　畠山直治（秋田）　髙橋京輔（秋田）

三浦三次郎（秋田）　川口半三郎（秋田）　清水運吉（秋田）

小田重藏（秋田）　後藤　侑（山形）　安部隆雄（山形）

荒木　衛（熊本）

八紘山地帯を後にした通信隊主力は全員僅かな米と塩を臂力で運搬、後方ジヤングルの奥地深く、数地点に分散展開したのであつた。臂力運搬した僅かな糧秣は数ケ所に分散集積し大事に大事に保管したのである。ジヤングル地内に

転進するや直ちに石崎有線隊長指揮のもと、有線分隊長 佐藤次郎曹長は部下を励まし第一通信所を設営すると共に各分隊長以下師団戦斗指令所と各部隊間の通信網架設の任務に着き健斗したのである。自活により食糧を自給自足すると云つても、海岸近くの日のあたる平地と違い、終日薄暗いジヤングルの中、樹木を伐り倒して耕地を造くろうにも米軍のヘリコプター（我々は「アブ」と称して恐れた）に邪魔され出来なかつたのである。「アブ」はマツフイン方面の砲兵陣地と連絡をとりながら昼中我々の集落地点を探索して飛びまわつていた。洗濯物をほしたり、煙り等をあげようものなら直ちに砲兵陣地に連絡され、砲弾が飛んでくる仕掛であつた。それでなくとも附近に盲砲弾が落下したりして危険極まりない状況下にあつたのである。夜は米軍砲兵陣地から、ところ嫌らわず盲砲弾が飛んで来て、安心して眠ることも出来なかつた。ジヤングルを伐り拓いて耕作することができないので、湿地帯に生えている野草を食し、小動物をとらえては之を食し、主食は専らサゴ椰子をひそかに伐り倒して採取したサゴ澱粉の粘り湯やその加工品（焼き餅）であつた。またサゴ澱粉を採取した後、放置しておいたサゴ椰子の幹に巣食うサゴ虫（かぶと虫の幼虫に似ていた）が唯一の動物性脂肪蛋白源でもあつたのである。このように益々栄養は不足し、ジヤングル特有の多湿に加え日光浴すらままならない極めて不健康な状態が続いたため、熱帯特有のマラリア、熱帯下痢、熱帯潰瘍等に冒され、極度の疲労により、多くの戦友を失うに至つたのであつた。

第 36 師団將兵の大半がジヤングル深く潜入した頃、223 聯隊及び 224 聯隊の戦斗部隊は八紘山附近から御祐川附近に至る間、山腹南面の密林地帯に陣地を構築し、敵の進出を阻止すべく対陣していたのである。

（以上　19 年 8 月 7 日～ 20 年 2 月 12 日第四次対陣）

前述の第一通信所のほか、ジヤングルの奥地深く展開した各自活班において武運つたなく英霊となられた戦友は次のとおりであつた。

○「第三倉庫」に於て　1 名　英霊の尊名

柴田伝之助（秋田）

○「第一通信所」において　10 名　英霊の尊名

鳥潟　茂（北海道）　北田正三（岩手）　大石堅治（秋田）
神尾雅雄（秋田）　鬼沢政之助（山形）　鈴木誠一（山形）
荒川貞雄（山形）　渡部福治（山形）　菊地善作（山形）
出島　勇（熊本）

○「第一集積所」において　31 名　英霊の尊名

和田孝二（青森）　橋坂吉太郎（岩手）　平館清志（岩手）
後藤勝助（岩手）　佐藤　栄（岩手）　髙橋正士（岩手）
小山金成（岩手）　清水川五八（岩手）　塩田重一郎（秋田）
佐藤金雄（秋田）　柴田浜藏（秋田）　関根良平（秋田）
米沢辰五郎（秋田）　安在庄吉（秋田）　木村志衛治（秋田）
長岐三智雄（秋田）　堀田新太郎（秋田）　今野武司（山形）
加藤政治（山形）　城戸口卯一郎（山形）　柴田芳美（山形）
佐藤利四郎（山形）　菅原和三郎（山形）　渡部光弥（山形）
千葉繁光（福島）　姉崎源之助（東京）　小泉秀史（大阪）
今村睦男（熊本）　緒方義喜（熊本）　福谷正俊（大分）
荒瀬　達（鹿児島）

○「第二集積所」において　5 名　英霊の尊名

及川秀男（岩手）　布施卯三郎（山形）　片岡良雄（東京）
矢野　弘（宮崎）　有村武義（鹿児島）

○「中間集積所」において　23 名　英霊の尊名

小倉喜代治（青森）　沢口吉雄（岩手）　横沢文四郎（岩手）
髙橋末五郎（岩手）　阿部藤太（岩手）　佐藤文雄（岩手）
八重樫万四郎（岩手）　細川幸一（岩手）　佐々木正一（岩手）
宇佐美金市（秋田）　木山堅一（秋田）　秋葉朋弥（山形）
色摩久三（山形）　成瀬宗利（山形）　武田文太郎（山形）
阿部政金（山形）　小林仲一郎（山形）　巴　正司（福島）
柿林　翁（島根）　田中正光（熊本）　古庄清志（大分）
枡田正寿（宮崎）　岩下末雄（鹿児島）

我が第36師団通信隊に於て、この間の状況は最も困苦欠乏の悲惨な状態であつたのである。部下思いの深い間瀬部隊長は連日各自活班に歩を運び、部下の一人一人に声をかけ励ましてくれたのであつた。この時点に於てサルミ上陸部隊226名中125名の戦友が英霊となられたのであり、その犠牲たるや実に大きかつたのである。この間の状況を私はマラリアのため長期療養中の小笠原曹長に代り、陣中日誌に次のように誌したことをまざまざと思い起すのである。

「サルミ上陸後は気候風土の異なる熱帯圏内に在りて、新宿営地たる八紘山及び後方密林地帯に於て、炎熱を侵し設営作業に従事せり、その間順れぬ気候風土の下に、然かも高温多湿のため、部隊一同、発汗、湿潤し、常に軽度の全身倦怠感を覚え身体に及ぼす影響大なりき、又作業繁劇なるため休養殆んどなく、然も之に伴う給養は不良なり、優秀装備を誇る敵軍と相対するや、連日猛烈なる砲爆撃を受け、湿地密林地帯内に於ける行動を余儀なくせられたり。湿地密林地帯に於ける気候風土及び宿営等の極めて非衛生的環境、加ふるに給養の不良なる最悪條件下に於て約半年の間連続機動作戦行動に参加、生命をも省りみず師団戦斗司令所と各部隊間の通信連絡の命脈を堅持せり。その間身体の違和感も厭わず霖雨に身を挺して日夜連続して、部隊軍需品の分散作業に任じたり。後方軍よりの補給全く無く、最悪の給養を続け、且つ幾度かマラリア、その他熱帯特有の風土病に冒され、榮養減退のため、身体の疲労、その極に達し、遂に体力を消耗し、健康を障害、病死せる英霊あとを絶たざる状況なり」と。

私はこのように書き誌し、對馬軍医大尉並びに津川少尉の校閲をうけたのであつた。

ビアク支隊配属無線分隊の奮闘

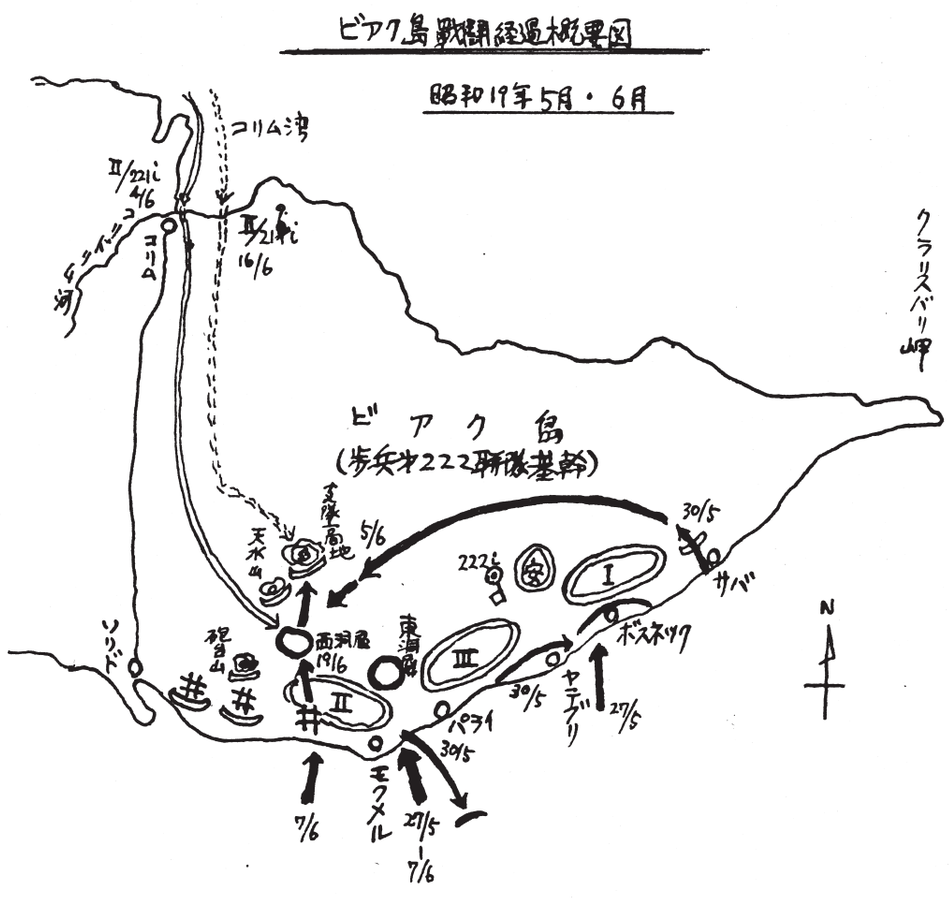
記述は遡及することになるが、ここで私はビアク支隊配属無線分隊について誌して置かなくてはならないのである。

昭和18年12月20日第36師団歩兵第222聯隊に配属のため、マニラに於て本隊と袂別した無線2個分隊分隊長 小滝三郎軍曹以下7名、長沢栄治伍長以下6名（計13名）は同年12月25日同聯隊と共にビアク島に上陸、上陸後第2軍直轄のビアク支隊となつた222聯隊長 葛目大佐の指揮下に入つたのである。

その頃第2方面軍は「サルミ」及び「ビアク島」を含むヘルヴィング湾一円を以て濠北防禦確得、線上の一大決戦場と定め、第2軍兵団の主力をここに配置を予定し、先着の第36師団の主力を「サルミ」に一部を以て「ビアク島」に配置せらるるに至つたのであつた。しかしながらその後増強予定の兵団が19年2月には中部太平洋に転用されるまま情勢は推移、4月に入り漸く増強配置すべく南下した第32師団並びに第35師団は5月6日「メナド」西北海上において敵潜水艦の魚雷攻撃をうけ、第32師団は歩兵1個聯隊と砲兵の約半分、第35師団は歩兵1個聯隊と砲兵の大部分を喪失するに至つた。かかる状況下、前方進出を危険なりしとし、大本営は5月9日西部ニューギニア方面要域に於て確保すべき第一線は「ソロン」「ハルマヘラ」附近の線とし、「サルミ」及びヘルヴィング湾要域「ビアク」「マノクワリ」附近要域は航空基地の設定（飛行場）に任ずると共に来攻する敵をその要域において破摧し濠北決戦の支撐となり、努めて永く之を保持すべき旨を指令。確保線を後退して前記各師団（32、35師団の残部）を「ソロン」及び「ハルマヘラ」に配置するよう変更指示した。これがためビアク島守備の兵力は歩兵第222聯隊を主力とし、第36師団より配属された一部の諸隊、野戦高射砲一箇中隊、飛行場設定隊三箇隊、軍直轄後方勤務諸隊の一部並びに航空地区部隊等であり、他に千田少將の率いる海軍第19警備隊と云う、同島を守備するには余りにも少ない兵力であつた。葛目支隊長は先づ航空戦備を優先重視し、支隊長自ら軍旗を奉じ航空基地（飛行場）の建設を督励する日日が続き、4月に至り漸く完成の目途がついたものの、在来の第7飛行師団は40～50機程度の補充状況であつた。又第2方面軍の頼みとしていた第6飛行師団も前述のとおり「ホーランジヤ」作戦に於て殆んど潰滅するに至つて居り、僅かにこの方面を担当する海軍第23航空戦隊もまた20機足らずの状況であつたのである。このように2箇の飛行師団をもつて西部ニューギニアにおける防禦編成の中核支撐点とする第2方面軍の戦略は全く水泡に期する状況下にあつたのである。このような状況下にあつて我が配属無線2箇分隊員13名はビアク支隊長の指揮下に入り、第2軍及び支隊傘下諸隊間の無線

連絡に従事し、来るべき決戦に備えていたのであつた。19 年 5 月上旬以来ビアク島は連日敵機の爆撃をうけるに至つた。前述のとおりビアク島は湾内第一の要点としながらも、その戦備状態は極めて不充分であつたが、葛目支隊長は第一大隊を「ボスネツク」附近より「サバ」附近に、第二大隊を「モクメル」及び同飛行場附近に、第三大隊をその中間（ヤテブリ及びパライ附近）に夫々配置し、航空地区部隊及び飛行場設定隊は飛行場地区を守備、「ヤテブリ」北方に支隊本部及び安藤集成大隊を配置していた。

支隊は兵種の如何に拘らず全力を以て戦斗に任ずる方針をとり、後方部隊の多くを戦斗部隊に改編して基幹部隊に配属し自ら戦力の増強を図ることとなり、我が無線 2 箇分隊も通信任務を遂行しながら 38 式騎兵銃を手に戦斗員として果敢に戦斗参加に身を投じたのであつた。そして遂に敵は「サルミ」附近上陸



の 10 日後の 19 年 5 月 27 日ビアク島に上陸を開始し、濠北方面及至全戦局に一転機を劃する壮烈なビアク作戦が展開されたのである。

その日、午前 5 時頃より敵はビアク島東南岸一帯に対し艦砲射撃及び爆撃を開始し、その掩護下に 7 時頃から水陸両用戦車並びに上陸用舟艇をもつて「ボスネツク」附近に上陸を開始した。そのとき海上には約 40 隻の敵機動艦隊が認められた。折から視察のため来島中の第二方面軍参謀長 沼田中将は帰還を中止、作戦指導に当ることとなつたのである。「ボスネツク」附近 150m の海岸低地に上陸して来た敵を第一大隊は 50m の断崖上から全火力をもつて迎撃し、或いは一部突撃を行い相当の戦果をおさめ、夜に入つてからは第一大隊主力は「ボスネツク」附近に、第三大隊は「ヤテブリ」附近に安藤集成大隊は「ボスネツク」附近に夫々夜襲を敢行戦果を収めた。又、第二大隊は「モクナル」附近の隘路を拒し戦車を先頭に突進して来た敵を撃退した。この間第 7 飛行師団及び海軍第 23 航空戦隊は全力をあげて出撃し本作戦に協力、自らも傷ついたが相当の戦果をあげた。又、ソロン飛行場に在つた飛行第 5 戦隊長 髙田少佐は勇躍ビアク上空に出撃し奮戦の後、僚機と共に敵艦に体当りを敢行、壮烈なる死を遂げたのであつた。5 月 28 日戦斗は益々熾烈を極め、敵は強引に上陸を続行して来たので昼間は火力攻撃、次いで夜襲を復行した。第二大隊は「モクメル」附近に強力な夜襲を敢行し、翌 29 日天明後には葛目支隊長は「ソリド」方面を警戒してこの方面に移動指揮をとり、第一大隊の主力を転用して戦斗を継続し、敵を海岸に圧倒して東方に敗走せしめた。この日の戦斗の重兵は第二大隊正面であつたのである。この間第 23 航空機隊は敵巡洋艦及び中型輸送船各一隻を撃沈した。敵は大いに辟易して隣接するアウイ島に軍隊資材の揚陸を開始した。その頃西洞窟にあつて作戦指導に任じていた沼田参謀長は有利なる現戦況に乗じて戦局転換の契機を作為すべき旨関係方面に打電した。

このときまで、中部太平洋方面「あ」号作戦第一主義に決定されていたが、ビアク作戦開始と共に俄かに大本営はビアク島を固守する方針の打出し、「あ」号作戦と並んでビアク作戦を作戦の枢軸としたのであつた。即ち南方軍は海上機動第二旅団を 5 月 31 日以後第 2 方面軍の指揮下に入れ、第 2 方面軍はこれ

をビアク上陸と共に第２軍の指揮下に入れることとした。海軍は第 16 戦隊を輸送隊とし、第５戦隊及び駆逐艦４隻を警戒隊とし、戦艦扶桑及び駆逐艦２隻を間接護衛隊として、海上機動第二旅団主力は６月１日「ダバオ」に投錨、６月４日ビアク島北岸「コリム」上陸の作戦を遂行すべく６月２日「ダバオ」を抜錨出陣した。当時この作戦を「渾」作戦と称したのである。

この間ビアクの奮戦はなおも続いていた。５月 30 日第７飛行師団及び第 23 航空戦隊の出撃援護のもと第二大隊第三大隊の攻撃により「ヤテブリ」以西「モクメル」に亘る一帯の敵は主力を撃破され「ボスネツク」及び「アウイ島」方面に退却したが第一大隊転用のため「サバ」附近の敵が一部台上に進出することになりたるため、支隊長は第一大隊を急遽この方面に反転、攻撃を命じた。又同夜、安藤集成大隊の一部は「ヤテブリ」西北方地区に進出せる敵に対し夜襲を敢行した。この日再び、沼田参謀長はこの戦機を捕捉すべき旨重ねて関係方面に打電したのである。

この間第２軍（司令部マノクワリ）は所有する大発艇の全部約 10 隻に第 35 師団（当時司令部はマノクワリに進出しあり）をして約１箇大隊をビアク島に増援せしめ、又、第２方面軍は第４南遣艇隊の協力を得て軍需品の前送を策定していた。ビアク支隊の健斗は更に続き、５月 31 日第三大隊は当面の敵を攻撃しその進出を阻止した。同夜第一大隊は反転に引きつづき台上進出の敵を夜襲し第一線を突破し宿営地を攻撃多大の戦果をあげたが、天明後敵の火力により大隊長以下多くの損害を蒙るに至つた。酷熱下、水も糧食も不足勝ちな悪条件の下展開されたビアク支隊の善戦敢斗範囲は、台上の水の所在地域に限定されたのであつた。又海岸に集積の糧秣は敵の上陸により、その大半を喪失したのである。６月１日以降「サバ」附近台上の敵は第一大隊の果敢なる反撃にも拘らず機械力をもつてジヤングル内に道路を開索し、重装備を推進しながら徐々に西進を開始した。６月２日ダバオを進発した前述の「渾」作戦部隊は翌６月３日敵機２機接触をうけるに至り、強力な敵機動艦隊がビアク方面にあるらしきため作戦を中止し、「ソロン」に至り機を覗うことになつた。かくして期待したビアク決戦最後の希望も消え去つたのであつた。

敵の台上進出部隊は我が反撃に阻碍され、緩漫なる前進であつたが６月４日

には「東洞窟」、５日には「西洞窟」を攻撃するに至つた。第三大隊は腹背に敵の攻撃をうけながら善戦克く海岸正面の敵の進出を撃退したが、待望の「渾」作戦増援部隊は来たらず、ただ第２軍の処置せる増援の歩兵第 221 聯隊第二大隊（第 35 師団）だけは６月４日「コリム」に上陸し逐次「西洞窟」に向つて前進した。これまで敵は５日間の損害 3,000 余名を数え、苦戦の状歴然たるものがあつた。この頃葛目支隊長は「ヤテブリ」北方にあり、「ボスネツク」附近の残存敵主力を夜襲すべく６月６日第二大隊主力をこの方面に転進させたが、７日「モクメル」飛行場正面に新たな敵が上陸を開始したため、夜襲を中止急遽第二大隊を反転させて「天水山」に到着したが敵火力のため昼間における爾後の前進は不可能なまま、敵の上陸は逐次進捗するに至つた。

「西洞窟」に在つて作戦指導中の沼田参謀長は８日、葛目支隊長の指揮及ばざる「パライ」以西の諸隊をもつて「モクメル」飛行場附近の敵主力を夜襲するに決し、第二大隊主力と集成の佐藤部隊をこれに当てた。しかるにこの夜襲は天明後、敵火力のため相当の損害をうけ第二大隊長 牧野少佐は壮烈な戦死を遂げるに至り旧位置に後退した。この間第三大隊は依然その陣地を保持して敵と相対峙していた。６月９日葛目支隊長は「西洞窟」に至り沼田参謀長と会し、諸隊を完全に掌握し、支隊主力を此の方面に集結せんことを企図するに至つた。

沼田参謀長は阿南第二方面軍司令官より再三にわたる帰還命令あり、又葛目大佐、千田少將より、「渾」作戦実現促進のため速やかに帰任せられたく懇請されたため、第二軍増援輸送の舟艇により帰任の途に着いた。海軍は６月８日第 16 戦隊をもつて約 600 の兵員を輸送する「渾」作戦再興を企図し、「コリム」沖まで到着したが敵艦隊と遭遇して不成功に帰し、又 10 日には第一戦隊及び第二水雷戦隊を「渾」作戦に編入し、三度履行を企図したが、いづれも戦機は既に去つていた。そして６月 13 日聯合艦隊の「あ」号作戦決戦用意の発令と共に、さしも紆余曲折を重ねた「渾」作戦は、ここにそのすべてを解消することとなつた。

６月９日以降、敵は圧倒的空軍艦砲、重砲、その他全火力をあげて戦車を先頭に「モクメル」飛行場正面海岸を北進し、台上の敵と呼応しつつ「西洞窟」に進攻してきたのである。

これに対し第一、第二大隊は「天水山」附近、221 聯隊第 2 大隊（35 師団よりの増援）は「西洞窟」附近にあつて連日連夜肉迫攻撃を敢行した。この頃になり、支隊の火砲は大部分を破損し、長谷川高射砲中隊は対空、対地両者にわたつて奮斗をつづけた。又、この間にあつて南間中佐（第 14 野戦飛行場設定隊長）の指揮する集成部隊は飛行場を制圧し、第三大隊は旧陣地を死守していた。6 月 19 日、敵軍団長アイケルバーカー自ら第一線に進出し、総攻撃を開始した。（この日マリアナ方面において聯合艦隊は再び Z 旗を掲げ「あ」号決戦が開始された日でもあつた。）支隊長 葛目大佐は「西洞窟」にあり、6 月 20 日敵の攻撃を撃退しつつも既に最後の迫れるを察し、軍旗を奉焼して御紋章旗竿及び房の一部を残し、房はこれを各大隊に分配した。

6 月 21 日、敵の執拗なる攻撃はつづき「西洞窟」は完全に包囲され戦車砲、火焔放射器等の攻撃をうけた。諸隊は決死敢斗、洞窟入口には彼我の死屍累々として、凄惨を極めるに至つたのである。ここに於て葛目支隊長の胸中、既に期するところあつたが、部下の切なる諌止により漸く思いとどまり、6 月 22 日の夜、暗を利用して「西洞窟」を脱出した。支隊長に従う者聯隊本部 50 名、各通信隊 40 名（おそらく、この中に我が無線分隊員も含まれていたものと推思される）第一大隊 40 名等僅かに百数拾名で、装備は小銃と擲弾筒のみであつた。このとき歩行不能なる重傷患者約百数拾名が皇国の必勝を祈りつつ莞爾として各々自決を遂げ、主力の脱出を容易ならしめたことは悲壮の極みであつた。残つた支隊主力は「西洞窟」西北方高地に、第二大隊主力は「天水山」北方高地にそれぞれ陣地を占領し、又第 2 軍が苦難を冒して新たに増援した 219 聯隊第 2 大隊（第 35 師団）が到着し、更に抗戦をつづけた。6 月 27 日頃より敵は陣前に近迫し、戦斗は連日惨烈を極めた。「東洞窟」の戦斗は 6 月 28 日南間中佐の自刃を以つて終りを告げ、これと相前後して第三大隊の陣地も惨烈なる戦斗の後、敵手に落ちたのであつた。

7 月 1 日、支隊長 葛目大佐は後方高地に後退し奉焼軍旗を護持して飽くまで敢斗すべきを副官に指示し、自らは従容として自決を遂げられたのであつた。かくして葛目大佐は多くの部下と倶にビアク島防備即ち飛行場を中核とする決戦支撑たるべき任務とその運命を倶にしたのであつた。偶々、日を同じくして

阿南第 2 方面軍司令官は「今後のビアク作戦に関し、遊撃戦に転換して過早の玉砕を避くべき」旨訓令を発したが、時既に遅きに失したのであつた。その後ビアク支隊の残存兵力は戦友の遺志を継ぎ久しきに亘つて遊撃戦を継続したが、糧秣補給もままならず、熱帯特有の病魔におそわれ、次々と英霊となる軍神あとを絶たなかつた。8 月中旬以降地上との連絡は全く杜絶し、全島玉砕に等しき運命をたどつたのであつた。

ビアク支隊が僅か歩兵 1 箇聯隊とその配属部隊とをもつて約 1 箇師団半と称される敵の大軍を引受け、月余に亘り、断乎、この戦略要点を確保した、その必死の敢斗振りは壮烈、まさに鬼神を泣かしむるものであつたのである。

第 36 師団通信隊より配属の無線 2 箇分隊の奮斗についてそれを具体的に記述することは全く不可能であるため、支隊全般の戦史を長々と誌（しる）すこととなつた。おそらく戦友達は終始支隊長と行動を共にして、敵の大軍を引受け、熾烈極まる戦斗のさ中にあつて、あるときは電鍵を握り、あるときは銃を手にして敢斗したに相違ない。戦友達がいつ、どこで、どのようになつたのか審かではないが、憶えばあまりにも悲壮な戦闘であつたのである。

ビアク支隊派遣無線分隊　13 名

小滝三郎（秋田）	長沢栄治（山形）
佐々木進一（岩手）	髙橋　實（山形）
村井義雄（岩手）	石川雄二（山形）
山崎　武（岩手）	軽部喜一（山形）
石郷岡金一（秋田）	岩船千賀男（岩手）
小松光男（岩手）	照井藤松（秋田）
岩田　長（大分）	

漸く持久戦に入る

昭和20年3月に入り、米軍の主力がフィリッピン方面に指向されたため、砲爆撃は散発的になり、漸く戦況は膠着状態に入るようになつた。陽も当らないジヤングル地帯での自活は衛生並に給養上、まことに由々しき状況であつたので、師団戦斗司令所はジヤングル地帯でも陽のあたる丘陵地に移動し始めていた。我が通信隊本部も司令所近くに位置する丘陵地「五軒山」へ移動したのである。他に「虎ヶ沢」「展望山」「南興林縁」並びに新たに設けた「糧秣集積所」等に部隊の一部は移動を開始したのであつた。この地点はいづれも陽当りは良く、或る程度の耕作も出来、自活に入ることが可能となつたのである。特に「五軒山」は千田准尉の指揮のもと、広範囲に樹木を伐採開墾し、甘藷、南瓜、小豆、玉蜀黍、タピオカ等を植え、収穫することができた。砂糖は全く無かつたものの、南瓜と小豆を煮て作つた小豆南瓜汁はあまりにも美味であつたことなど彷彿として思い出される。偶にはジヤングル内で中動物を獲えたり、鳥類を捕えたり、原地産のバナナ、パパイヤ、パンの実などを食することも出来るようになつた。若しジヤングル内に移動してから、このように耕作し自活できたら、あんなに多くの戦友を失なわずとも良かつたのにと語り合つた。このように戦斗はいつしか平穏になり、ジヤングル地帯での自活活動に若干の変化をもたらしたとは云え、長期間に亘りマラリアに冒かされ、加えて給養は最悪であつたため、その極に達していた身体の疲労はなかなか回復する能わず、武運つたなく英霊となられた戦友は次の通りであつたのである。

○「虎ヶ沢」において　4名　英霊の尊名

大橋利雄（岩手）　木元仁平衛（秋田）　福士三郎（秋田）

井ノ口彦四郎（滋賀）

○「展望山」において　2名　英霊の尊名

夏井喜代治（秋田）　髙橋秀八（秋田）

○「南興林縁」において　3名　英霊の尊名

堀井栄藏（秋田）　池田忠明（熊本）　八島継雄（熊本）

○「糧秣集積所」において　3名　英霊の尊名

菓沢利三郎（岩手）　熊谷公一（岩手）　川村剛助（山形）

○「五軒山」において　3名　英霊の尊名

泉信太郎（秋田）　川目雄一（岩手）　石川硯治（山形）

ここに於て、間瀬部隊長は部下兵士の健康状態をいたく心痛、展開中の各自活班の給養状態の均等に意を注ぎ、一部上級者の勝手な行動を叱制する等、日夜部下の疲労回復を祈られていたのであつた。

再たび八紘山へ

昭和20年6月になり、戦況は依然として膠着状態であつた。歩兵第223聯隊並びに歩兵第224聯隊の主力は「御祐」「サワル」飛行場、「八紘山」にわたつてジヤングル内に陣地を構築、自活をしながら米軍と対峙していたが、戦斗状態に入ること無く、著しく状況が変化して来たので、師団戦斗指令所は移動を開始した。我が師団通信隊も再び「八紘山」西南地点に本部を移動することになつたのである。この地点は以前のような密林地帯ではなく、陽当りも比較的良い地域であつた。直ちに「八紘山♂」並びに「八紘山▼」を設営し、各部隊間の通信連絡に当つたのであつた。このとき千田准尉の率いる臂力搬送班は後方ジヤングル地帯に集積して置いたとつておきの僅かな米や塩等の糧秣を米軍の目をかすめ八紘山の部隊本部まで運んだ。私が第一回目の搬送に参加した後、蓄積していた疲労とマラリア発病のため数日間も高熱が続き、生死の境を彷徨つたのもこの頃であつた。

また、「御祐」（ウオスケ）地点に有線1箇分隊を分遣し連絡にあたらせた。6月も過ぎて7月頃から米軍機による降伏勧奨のビラが撒かれ始めた。「フイリツピン」「沖縄」は既に米軍の制圧下にあり「本土」は風前の灯の如き内容のものだつた。「八紘山」に移動後も蓄積した疲労とマラリアに冒され、武運つたなく英霊となられた戦友は次のとおりであつた。

○「八紘山♂」において　8名　英霊の尊名

塚田友治（北海道）　芳賀茂見（岩手）　三松　隆（岩手）
三浦誠一（秋田）　佐々木東太郎（秋田）　平　英吉（山形）
須田芳藏（山形）　葛迫豊吉（鹿児島）

○「八紘山(▼)」において　３名　英霊の尊名
千葉松夫（岩手）　原口　茂（熊本）　並里武英（沖縄）

○「御祐（ウオスケ／ワイスケ）」において　５名　英霊の尊名
齊藤　濟（秋田）　庄司重雄（秋田）　佐藤良雄（秋田）
足達幸一（山形）　山下秋雄（鹿児島）

終戦を迎えて

ついに、昭和20年８月15日がおとずれたのである。

「サルミ」上陸後我が通信隊は無線機による一般情報を常に傍受していたので比較的早く終戦の状況を知つたが師団長はなぜかその内容を極秘にするよう部隊長に命令されたのであつた。多分あまりにも突然の発表では師団将兵の動揺を懸念したためであつた。しかしながら日本降伏のビラが敵機により撒かれ始めたことにより、それから数日を経て師団長より停戦命令が発せられたのである。

間瀬部隊長は集合可能なる隊員を前にして沈痛な面持ちで一同に対し停戦を伝え、わかる範囲内で今後の我々の身の振り方について指示されたのであつた。停戦命令をうけた隊は一瞬ホッとした安堵感と昂奮に包まれたが、だんだんと虚脱感にさいなまれて行つた。思えば昭和18年12月25日「サルミ」上陸から昭和20年８月15日までの間、泥沼の如き戦斗行動に終止符を打つたのであつた。上陸後は思いもよらぬ熱帯圏下の悪条件のもと激しい戦斗のさ中に身を挺し、なんとかここまで辿り着いた者達はそのとき、亡き戦友を次々と思い出しては迸(ほとばし)る涙で頬を濡らし慟哭(どうこく)したのであつた。それから間もなく、命により軍事機密に属する暗号書（乱数表等）、重要書類、無線機材部品等を処分したのであつた。その後私は津川少尉の指示により、師団司令部より通達の統一内容として、該当する部隊全員の功績名簿所要欄に次のとおり作戦内容を記載したのであつた。

自　昭和18年12月25日 至　昭和19年　４月20日	「サルミ」「マツフイン」附近の警備並びに作戦準備
自　昭和19年　４月21日 至　昭和19年　５月16日	「サルミ」「マツフイン」附近の対空戦斗に参加
自　昭和19年　５月17日 至　昭和19年　８月　６日	「トム」「マツフイン」附近に於ける戦斗に参加
自　昭和19年　８月　７日 至　昭和20年　２月20日	「サルミ」地区敵進攻破碎作戦に参加
自　昭和20年　２月21日 至　昭和20年　８月15日	「サルミ」地区残敵掃蕩並びに守備
自　昭和20年　８月16日	「サルミ」に於いて停戦に伴う處理業務に従事

連合軍と第36師団の間に正式に停戦成立後、濠州軍並びにオランダ軍接収官による武装解除が行なわれ、武器弾薬等の授受が友好的に行なわれたのであつた。我々は捕虜収容所に収容されることなく、南興農園一帯に集中営の形で宿営することになつた。このようにあまりにも穏便な措置ではあつたが両軍に随従していた第三国人により一部集営では不当の物品強要の摩擦があつた模様であつた。「サルミ」進駐の濠州軍將校下士官が時々宿営を巡察してきたが、ただ立寄る程度で厳しさは感じられなかつた。「南興農園」における給養は自活によるほか無く、「かぼちや」「すいか」「さつまいも」「タピオカ」等の栽培に頼ることとなつた。ときたま、濠州軍より「大豆」の補給をうけ、暫く振りで植物蛋白源を摂取することが出来たのである。動物蛋白源としては河川をのぼつてくる小さな「エビカニ」や古蚊帳を利用して即製した網で海中より掬いあげた小魚等で、それに耕作中地中より出てくる「土トカゲ」（どじようと称した）ぐらいであつた。何よりも救われたことは、大ぴらに大空の下で働けることであつたのである。

濠州軍より訊問をうける

武装解除を受けて間もない或る日、私は津川少尉から「師団隷下・指揮下各部隊の將校・下士官が、濠州軍の訊問をうけることになつたから部隊長と一緒

に出頭するように」と伝達されたのであつた。あまりにも突然の命令でどんなことなのか知る術はなし、戦友達からは“戦犯として裁かれるかも知れないぞ”などと嚇され、心中まことに穏やかならぬものがあつた。

その日は晴天、サルミ半島附近の濠州軍進駐地点に出頭した。簡単な幕舎附近には自動小銃を手にした数人の兵士が目を光らせていた。いよいよ、私に順番が廻つて来て幕舎の中に招じ入れられた。中には進駐部隊長と尋問にあたる中尉、それに私の横腹近くに自動小銃をつきつけている軍曹と、他に２名の小銃を手にした兵士が居た。後程わかつたが、中尉は日本のＲ大学に留学したことがあり、流暢な日本語を話し、更に驚いたことには、日本国内の田舎の町についてまでも実に良く知つていたのである。（以下そのやりとり）

“これから聞くことに正直に答えなさい。若し詐つて答えると偽証罪として拘束することになる”

“あなたの所属部隊名と官等氏名を言いなさい”

―私は正直にそれらを答えた―

“あなたの出身地は日本のどこですか”

―山形県鶴岡市だと答えたら―

“おお、鶴岡、僕行つたことがある、近くの湯之浜温泉ほんとに良いところですね。あなたが正直に話してくれれば、きつと間もなく鶴岡へ帰れますよ”

と云われたのには本当に驚きであつた。その後尋問を受けた内容は「日本軍隊空砲射で打ち落とされ海中に不時着し海岸にたどりついた生存者はだれがどのようにしたか」を問うものであつた。正直、私はその事実を知つていないし耳にしたこともなかつたので、あくまでも“知つていない”、“聞いていない”と返答したところ

“ほんとうに知つていないのですか、嘘はいけませんよ”と執拗にせまつて来たので私は

―神に誓つて嘘は言いません―とはつきり答えたら

“聞きたいことはそれだけ、帰つて宜しい”と中尉は尋問を結んだのであつた。

始めは軟かく出て、その後は本当に執拗に問い詰めてきたので、心中まことに平穏ではなかつたが臆せず答えるしかなかつたのである。

友軍に打ち落とされた敵機の一件、その後どのようになつたかを風の便りに耳にしたが、噂はいつしか消え失せて語り草とはならなかつた。

募る郷愁

濠州軍の監視下にありながら、思いもよらぬ安穏な日日が続き、他部隊将兵達の間にも交流が盛んになり、ついに「南興農園」の一角に演芸場の出現をみるまでになつた。即製の舞台狭ましと騒ぎまわる田舎役者、声高々と歌う、故郷自慢の民謡などますます故国日本への郷愁はつのるばかりであつたが、何故か盛りあがらなかつたのである。内地帰還の噂話は飛び交い、毎日のようにサルミ海岸に出ては水平線上はるかに輸送船の現われるのは今か今かと待ちあぐむうちに昭和21年の正月もすぎ、２月、３月、４月、５月と月日が経ち、ついに６月３日待ちに待つた日が訪れたのであつた。

しかしそのときまで、幸いにして生命を繋ぐことの出来た部隊達は一様に喜びのみに浸ることはできなかつたのである。「南興農園」に集営してから内地帰還を夢見て日夜労苦を共にしてきた戦友のうち、長い戦斗中の無理がたたつて健康を障害し、回復はままならず、手をとり合いながら次々と涙を流して去つて行つた英霊達を深く思つていたのであつた。

集営地「南興農園」において武運拙なく英霊となられた戦友は次のとおりであつたのである。

○「南興農園」において　18名　英霊の尊名

藤原勝太郎（北海道）	八重樫與七（岩手）	佐藤清見（岩手）
佐藤栄治（岩手）	佐藤彦士（岩手）	佐藤養治（岩手）
鈴木道男（岩手）	新田一男（岩手）	菅原　稔（岩手）
平川長太郎（秋田）	山崎六郎（秋田）	薄田嘉悦（秋田）
橋本芳一（秋田）	片倉豊治（秋田）	長沢博康（山形）
伊藤　直（山形）	千葉恒夫（山形）	山内幸男（茨城）

内地帰還

昭和21年6月3日第36師団通信隊の生存者51名の内47名は（病弱者4名は6月1日病院船氷川丸で先発帰還）第36師団傘下各部隊の生存者と共に米国よりのチヤッター船リバテー号に乗船、二度と訪れることはないであろう思い出悲しき「サルミ」に別れを告げたのであつた。「上海港」を出帆し「サルミ」に上陸した隊員は226名とされる。しかるに生還者は僅かに51名であつた。「上海」から「サルミ」に向うときは十数隻の船団であつたが、帰還のときはただ一隻の船に第36師団生存者全員が乗船出来た程に悲惨な帰還であつた。「サルミ」に向うときは1ヶ月以上もの長い航海であつたが、僅か2週間の航海で6月17日「名古屋港」に到着、故国の土を踏んだのであつた。「サルミ」出港の際、師団長 田上八郎中將並に参謀長 今田新太郎少將は乗船を共にすることができず、濠州軍にいづこかに連れ去られたと風聞したのであつた。先に述べたホーランジヤ転進部隊の某指揮官が多くの兵士をトル河右岸に置き去りにし己れのみ安全な後方に逃避して内地帰還を果している行動にくらべ、なんと立派な我が36師団の上級指揮官であつたろうとつくづく思つたことであつた。又、帰還船の中で他部隊では上官を囲こみ、吊しあげの総括をしたのを聞いたが、我が師団通信隊ではそのようなことは全くなかつた。これも一重に間瀬部隊長がジヤングル内の自活班で上級者の勝手気儘な行動を厳しく禁制し、兵と苦楽を共にすることを常に説いてきたためであつた。

名古屋上陸の翌6月18日には、従軍並びに召集解除となり、復員した隊員達は変り果てた日本の姿に一時は呆然自失の状態であつたが、生きて日本の土を踏みしめることのできた感激をしみじみと噛み締めながら、戦友互いに手を握り合い、再会を約して各々の故郷へと旅立つたのである。

帰還者　51名

間瀬三郎（岩手）	津川美佐男（青森）	小笠原信雄（青森）
本城　直（岩手）	小田島勝見（岩手）	梅沢清次郎（岩手）
松本政雄（岩手）	藤原貞雄（岩手）	藤沢七郎（岩手）
宮守市太郎（岩手）	平山伊佐雄（岩手）	堀内重郎（岩手）
佐々木栄太郎（宮城）	芳賀武一（宮城）	三浦勇治（宮城）
佐藤次郎（秋田）	伊藤金三郎（秋田）	小笠原準一郎（秋田）
柿崎長太郎（秋田）	片倉堅吉（秋田）	髙橋賢次郎（秋田）
藤原芳美（秋田）	目時忠雄（秋田）	井田富雄（山形）
板坂七郎（山形）	石塚代次（山形）	長谷川三郎（山形）
富樫武三（山形）	奥村久治（山形）	梅津彦次（山形）
松田俊雄（山形）	今野岩雄（山形）	佐藤久治（山形）
齋藤石藏（山形）	太田久夫（山形）	八子光信（新潟）
前川三郎（福井）	笠原　正（福井）	中里文吉（茨城）
石崎隆三（秋田）	千田久末（岩手）	江篭草次（鹿児島）
藤村前忠（鹿児島）	肥後啓二（鹿児島）	鹿野正雄（岩手）
中村政喜（茨城）	對馬乾六（北海道）	髙橋喜代治（秋田）
千葉一二三（岩手）	小原春吉（岩手）	剱重敏夫（山形）

話しは余談になるが「サルミ」上船時、間瀬部隊長は胸の奥深く、一通の親書を抱いておつた。それは第36師団参謀長 今田新太郎少将より陸軍中將 石原莞爾あての親書であつたのである。

東條英機大將と意見が合わず退役した石原莞爾は（東亜連盟最高顧問、著書世界最終戦論、農工一体論は有名）当時鶴岡市近郊森片部落の中里治兵衛（同連盟幹部）別邸にて病気療養中であつた。

昭和21年8月の或る日､間瀬部隊長は突然私の朽屋を訪ねられたのであつた。私は森片まで案内し、部隊長は無事、今田少將の親書を石原將軍に渡されたのである。その後は鶴岡市及び周辺の遺族を訪問、佛前に額づき深く戦友の冥福を祈ると共に、遺族に対し、英霊の奮闘状況を具さに話し、弔意を表されたのであつた。

その夜は私の朽屋に一泊し、翌朝鶴岡在住の戦友髙橋（旧姓富樫）武三君宅を訪問、大いに語り合い、午後髙橋君と私に別れを告げ、酒田方面へと旅立たれたのである。間瀬部隊長が親しく、戦友の遺族を弔問なされましたことは、遺族はもとより我々にとつて、実に感涙おくあたわざることであつたのである。

あとがき

本誌を起稿するにあたり、当初資料となつたものは、肌身離さず隠し持つて来た私の従軍メモの一部と昭和21年3月25日「サルミ」に於て千田准尉が調製された第36師団通信隊生存者の住所録と哀悼録（いづれも原簿写）であつた。

日日、亡き戦友を偲び、その冥福を祈りつつ、何か書き残して置かなくてはと考えつつも、なかなか筆は運ばなかつたのである。このままでは歳を重ねるばかりで、益々記憶も薄れる一方なので、此の度思い切つて、不充分ながらも私の拙い記憶に基づいて記述し「慰霊鎮魂の紙碑」としようと思いたつたのである。

昭和57年9月天童温泉における戦友会に於て、戦友梅津彦次君が原簿に基づいて補完再調製した住所録、哀悼録等を拝受し、又、戦友井田富雄君よりは山形新聞掲載記事「西部ニューギニア雪部隊戦没者慰霊巡拝の旅」のコッピーを拝受し、大いに輔かつた。

あらためて、両君に対し厚く感謝申し上げる次第である。

その他は後日収集した諸資料のほか私の記憶によるものなれば、相違の点は何とぞお許しを請うものである。

昭和61年12月

佐　藤　久　治

［附 表］

第 36 師団通信隊　沿革史

年　月　日	概　　要	歴代部隊長
昭和 14．2．7	第 36 師団（通信隊）編成下令	陸軍少佐 松　井　利　生
3.25	同編成完結	
4.18	北支派遣のため弘前出発	
4.20	神戸港出帆	
4.25	塘沽上陸	
4.29	太原到着 同地警備	
5.23	五台作戦参加	
7．1		
7.10	輸次に移駐 同地警備	
8.21	西作戦参加	
9.16		
?	潞安に移駐 同地警備	
昭和 15．3.28	春季晋南作戦参加	
5．8		
5．9	晋南反撃作戦参加	
6.20		
8.21	潞晋反撃作戦参加	
9.30		
10．9	晋中第二期作戦参加	
11.30		
12.11	第一号作戦参加	
昭和 16．2．6		
2.25	淩川作戦参加	陸軍少佐 徳　重　房　夫
3.20		
3.29	淩川西側地区掃蕩作戦参加	
4．2		
5．1	中原会戦参加	
6.15		
9.20	沁河作戦参加	
10.20		
10.30	黎城作戦参加	
11.21		
12．8	第 27 軍掃蕩作戦参加	
12.22		
昭和 17．2．2	冬季山西粛正作戦参加	陸軍少佐 阿比留　敏　雄
3．4		

年　月　日	概　　要	歴代部隊長
4.21	武郷作戦参加	
4.25		
5.13	晋冀予辺区作戦参加	
6.16		
6.17	南部大行作戦参加	
7.20		
10.20	秋季山西粛正作戦参加	
11.23		
昭和 18．4．5	18 春大行作戦参加	陸軍大尉 大　西　孝　雄
5.31		
7．1	18 夏大行作戦参加	
7.31		
10．8	潞安出発	
10.17	上海到着 同地警備	
11.18	南方転進のため上海港出帆（239 名）	
12.20	マニラに於てビアク支隊配属無線 2 箇分隊（13 名）配属	
12.25	西部ニューギニア、モルツカ州「サルミ」上陸 将校 6、准下 21、兵 199、計 226 名	陸軍少佐 間　瀬　三　郎
12.25	サルミ、マツフイン附近の警備並に作戦準備	
昭和 19．4.20		
4.21	サルミ、マツフイン附近の対空戦斗参加	
5.16		
5.17	トム、マツフイン附近 戦斗参加	
8．6		
8．7	サルミ地区敵進攻破碎作戦参加	
昭和 20．2.20		
2.21	サルミ地区残敵掃蕩並に守備	
8.15		
昭和 21．6．1	病院船（氷川丸）乗船者 帰還 准下 3、兵 1、計 4 名（6 月 17 日大竹港到着）	
6．3	内地帰還のためサルミ港出帆　47 名	
6.17	名古屋港　上陸	
6.18	復員	

○上海出帆　239
○ビアク支隊配属　(–) 13
○サルミ上陸　226
○マノクワリ派遣　(–) 1　（深澤雄（山形）生還）
225

174（サルミ附近、ワクデ島戦没英霊）
51（生還）